

文部省科学研究費補助金などについて

牧 田 貢*

さて世の中は自由貿易主義で代表されるような公正な自由競争を奨励する傾向にある。われらが研究費もこの波の中にあるといつてよいだろうどこかのスポーツ大会に臨むように“我々は正々堂々……”と唱えて研究費を獲得し、天文学の進歩に貢献しようではないか。

研究費が足りないという話は昔からある話であるが、その実感は最近私の身の周りにもひしひしと迫るようになって来た。“昔はアソベタのに”という不謹慎な表現を許してもらえば何年か前は何か思いついた時に何かを購入してすぐ実験ができたように記憶する。近頃は何か思いついてもそれを実現するための資金の算段からはじめなければならぬ。昔恵まれていて今恵まれぬ状況になりつつある私の場合が一般的であるとは思わぬが、編集部からの研究費について何かという要請を受けた機会に少々調べたことを書きたいと思う。

新しい研究計画をはじめようとする時に経常費の範囲内ではじめられる。或はそれを新しい経常費として認められれば問題は無いが、そうでない場合はどうしても外の研究費に頼らざるを得ない。ここ一年位の間に天文月報に掲載されたこの種の研究資金を調べたところ次の5件が見つかった。

- (1) 朝日学術奨励金
- (2) 日本証券奨学財団研究調査助成
- (3) 三菱財団自然科学研究助成
- (4) 山田科学振興財団研究援助
- (5) 東レ科学研究助成

いくつかの研究が天文学会の推薦を受けてこれらに応募したはずである。しかし、何といつても一番大きな経常費以外の研究資金源は文部省科学研究費補助金であろう。毎年11月頃に翌年度分の応募^〆切がある。昭和60年度分は総額420億で応募53,000件の中から15,000件が採用になっている(科学研究費研究会編「昭和60年度文部省科学研究費補助金採択課題一覧」:発行・株式会社ぎょうせい)。ここではこの「一覧」に基いて多様な補助金の中から身近と思われるいくつかを抜き出してのべてみることにする。

まず「科研費(文部省科学研究費補助金)はなかなか当たらない」という声があるので採択率はどうなっているのか昭和60年度について調べてみた。

総合研究(A)	7.0	90/355
〃(B)	1.5*	30/102
一般研究(A)	11.8	49/313 申請額 5000万未満

* 東京天文台 Mitsugu Makita:

一般研究(B)	14.3	222/1522 申請額 1000万未満
〃(C)	8.5**	504/3107 〃 300万 〃
奨励研究(A)	4.1**	473/1331 〃 120万 〃

総合研究は各研究機関に研究者が分布している場合であり、他は単一の研究機関の研究者が主となる場合である。奨励研究(A)は特に37歳以下の研究者を対象としている。第2列の数字は億円の単位で*は全体,**は理学部門、無印は物理系に配分された金額である。第3列の分数で示したのがそれぞれの金額に対応する応募及び採択課題数であるが、これで見ると奨励研究の採択率が一番高い。

ここで採択率を決めている各専門分野への研究費の「配分方式」なる「式」を眺めて見よう。

総合研究(A)

$$\frac{A \text{ の専門分野別配分額}}{2} + \left(B - \frac{A}{2} \right) \times \frac{6a+2b+2c}{10}$$

一般研究

$$\frac{A \text{ の専門分野別配分額}}{3} + \left(B - \frac{A}{3} \right) \times \frac{6a+2b+2c}{10}$$

奨励研究(A) $B \times \frac{8a+b+c}{10}$

ここで

- | | |
|-------------|------------|
| A 前年度配分額 | B 本年度配分額 |
| a 前年度配分額比率 | b 申請研究経費比率 |
| c 申請研究課題数比率 | |

(B-A/2)とか(B-A/3)というのは前年からの継続研究課題の分を差し引いた残りの新規研究課題分という意味である。これらの式のくわしい解説はご覧の方々の御判断に委ねたい。ただ分ることはbやcが小さいと配分類が減るだけでなく、次年度のaに影響してることである。明らかに需要供給の原理がここに導入されている。そこで科研費に当らなかった方々に慰めにならない慰めを申し上げることになる。“あなたのおかげでbやcが増し、天文全体に於ける研究費が増したのです、どうもありがとうございます。”

研究資金源の一覧を以上でして来たわけであるが、ここで一つ注意すべきことはこれらが全て一時金であるということである。研究費が続いている間は良いが、それが2~3年で切れてしまうと折角購入した装置を運転する維持費に困る。長期に亘る観測、実験にはどうしても経常費として研究費を取得しなければならない。このところは難しいことではあるが各研究機関の努力にまっほかはないようである。